

令和7年度「全国学力・学習状況調査」の結果 －分析から見えてきた成果・課題と今後の取組について－

区名	西淀川区
学校名	川北小学校
学校長名	古谷 史恵

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、令和7年4月17日（木）に、6年生を対象として、「教科（国語・算数・理科）に関する調査」と「児童質問調査」を実施いたしました。

大阪市教育委員会では、保護者や地域の皆様等に説明責任を果たすとともに、より一層教育に関心をお持ちいただき、教育活動にご協力いただくため、各学校が調査結果や調査結果から明らかになった現状等について公表するものとしています。

本校でも、調査結果の分析を行い、これまでの成果や今後取り組むべき課題について明らかにしてまいりましたので、本市教育委員会の方針に則り公表いたします。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。

1 調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2 調査内容

(1) 教科に関する調査

- ・国語
- ・算数
- ・理科

(2) 質問調査

- ・児童に対する調査
- ・学校に対する調査

3 調査の対象

- ・国・公・私立学校の小学校第6学年の原則として全児童
- ・川北小学校では、第6学年 78名

令和7年度「全国学力・学習状況調査」結果の概要

平均正答率については、国語は、全国平均を3.8ポイント、大阪市平均を2ポイント下回った。算数は、全国平均・大阪市平均より共に7ポイント下回った。理科は、全国平均を2ポイント下回ったが、大阪市平均との差はなかった。令和6年度の平均正答率と比べ、全国平均との差が、国語で0.1ポイント、算数で4.6ポイント広がった。大阪市平均との差は、国語は、令和6年度と変わらず2ポイント、算数では6ポイント広がった。

平均無回答率については、国語は、全国平均を1.3ポイント、大阪市平均を0.8ポイント下回り、無回答率は低かった。算数は、全国平均を0.2ポイント下回ったが、大阪市平均には0.1ポイント及ばなかった。理科は、全国平均と差はなく、大阪市平均を0.2ポイント下回った。どの教科も諦めずに最後まで取り組んでいた様子が伺えた。

質問紙調査において、肯定的回答が全国平均・大阪市平均を上回っているのは、「人が困っているときは、進んで助けていますか」であり、「5年生までに受けた授業で、PC・タブレットなどのICT機器を、どの程度使用しましたか」、「学級の友達との間で話し合う活動を通して、自分の考えを深めたり、新たな考え方方に気付いたりすることができますか」、「理科の勉強は好きですか」は、全国平均を下回っているが、大阪市平均は上回った。全国平均・大阪市平均と共に下回ったのは、「朝食を毎日食べていますか」、「自分にはよいところがあると思いますか」、「将来の夢や目標を持っていますか」、「国語の勉強は好きですか」、「算数の勉強は好きですか」であった。

分析から見えてきた成果・課題

教科に関する調査より

〔国語〕 学習指導要領の内容別に見ると、「(2)情報の扱い方に関する事項」では、大阪市平均を2.6ポイント、「(3)我が国の言語文化に関する事項」では、全国平均を3.7ポイント、大阪市平均を5ポイント、「A話すこと・聞くこと」では、大阪市平均を2.2ポイント上回った。全国平均と大阪市平均を下回った事項に関して、特に差が大きかったのは「(1)言葉の特徴や使い方に関する事項」で、全国平均より7ポイント、大阪市平均より7.2ポイント下回った。差が小さかったのは、「(2)情報の扱い方に関する事項」では、全国平均を0.1ポイント、「A話すこと・聞くこと」では、全国平均を0.1ポイント、「B書くこと」では、大阪市平均を0.5ポイント下回った。相手の発言の目的や理由について正しく選択することができていた。総合的読解力育成カリキュラム等への継続的な取り組みが成果として挙げられる。

〔算数〕 学習指導要領の領域別に見ると、全ての領域において全国平均・大阪市平均共に下回った。特に差が大きかったのは、「C測定」領域で、全国平均より10.3ポイント、大阪市平均より10.4ポイント下回った。結果から、意味を伴った理解や単位を決めて数を表現することなどの、算数の土台となる部分の理解に課題があると考える。

〔理科〕 学習指導要領の区分・領域別に見ると、A区分の「『エネルギー』を柱とする領域」では、大阪市平均を2ポイント、「『粒子』を柱とする領域」では、大阪市平均を1.2ポイント、B区分の「『地球』を柱とする領域」では、大阪市平均を0.9ポイント上回った。全国平均・大阪市平均を下回った事項に関して、特に差が大きかったのは、「『生命』を柱とする領域」で、全国平均を4.3ポイント、大阪市平均を3.7ポイント下回った。全国平均や大阪市平均を上回る区分・領域が多かった理由として、専科制度によるきめ細やかな指導や、実験や観察などを多く取り入れた授業の工夫などが挙げられる。

質問調査より

「人が困っているときは、進んで助けていますか」(96%)と肯定的回答をする児童の割合は、全国平均・大阪市平均を上回った。「5年生までに受けた授業で、PC・タブレットなどのICT機器を、どの程度活用しましたか」(33.3%)では、ほぼ毎日使用する児童が全国平均・大阪市平均を上回った。「学校へ行くのは楽しいと思いますか」(85.3%)、「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方方に気付いたりすることができますか」(84%)、「理科の勉強は好きですか」(77.4%)について肯定的回答をする児童の割合は、全国平均を下回ったが、大阪市平均を上回った。

「自分には、よいところがあると思いますか」(64%)、「将来の夢や目標を持っていますか」(80%)、「国語の勉強は好きですか」(54.7%)、「算数の勉強は好きですか」(44%)は、全国平均・大阪市平均を下回った。

調査結果から、授業におけるPC・タブレット等のICT機器の活用は、学校生活において文房具の一つとして日々授業等に活用できていると言える。一方で、国語科や算数科の学習に関しては、苦手意識を持つ児童の割合が多かった。

全ての児童が、学校や学習が楽しいと感じる教育活動を展開するとともに、一人ひとりが学校生活等において自己肯定感や自尊感情を高めることができるような取り組みや、学習に興味・関心を持ち、意欲的に取り組むことができるような手立てや教員の授業力向上に努める必要がある。

今後の取組(アクションプラン)

国語、算数とともに、個の理解度に応じた指導や学びの場を設定するなど、学びの形を工夫していくことで、基礎的・基本的な学習内容の確実な定着を図る。その基礎力を土台とし、他者との対話や協働を通して、様々な課題や問い合わせ自ら発見したり、最適解や納得解を導き出したりする力を養う。

教員についても、児童が学習に取り組む中で、知的好奇心や自己肯定感を高められるよう、授業研究や研修を進めることで、教員の授業力・指導力向上に努める。また、全学年を通しての学びの系統性を明らかにし、教材研究に取り組む。

また、全教育活動において、自分のよさに気づき、他者理解を深める機会を多く設け、自他を大切にする児童を育てていく。

引き続き、デジタルドリルやオンライン学習の有効活用を図ることで、自ら計画を立てて学習する習慣を身につけさせるとともに、自主的に学びに向かう態度を育成する。